

論文要旨

日本で成長した日系ブラジル人青年のエスニックアイデンティティ形成と影響要因

田中 詩子

1990年に出入国管理及び難民認定法が改正され、日系ブラジル人の就労目的での来日が急増した。それに伴い、家族に随伴して来日する、あるいは日本で生まれる日系ブラジル人の子どもが増加していった。近年は、滞日の長期化がみられるものの、日系ブラジル人の子どものエスニックアイデンティティに関する研究は僅少である。成長過程におけるエスニックアイデンティティの形成について検討することで、彼らの抱える問題や困難の一端が明らかになると考える。そこで、本研究では、日本で成長した日系ブラジル人青年のエスニックアイデンティティ形成の様相とその影響要因を明らかにすることを目的とする。

本研究は、全7章で構成される。第1章と第2章では文献研究を行い、第3章から第6章では実証研究、第7章において総合的考察を行った。

第1章では、日系ブラジル人の歴史的背景、および1990年代初頭より日本に急増した日系ブラジル人の現状について概説した。また、家族とともに日本に滞在する日系ブラジル人の子どもの現状として、教育・学校、言語、親との関係性、移動が強いられる生活についてデータや関連する研究を示し、アイデンティティ形成に問題を抱える可能性のあることを論じた。

第2章では、まず、アイデンティティについて青年期の研究を中心に概観した。次に、エスニックアイデンティティの定義を示した上で、エスニックアイデンティティに関する研究について概説した。日系ブラジル人の子どものエスニックアイデンティティ形成には、家庭のブラジル文化と学校の日本文化を行き来するという、二元的文化化の環境が影響していることが示唆された。また、ブラジルへの帰国の影響も考えられるものの、アイデンティティとの関連で検討している研究はほとんどみられなかった。以上より、研究課題を設定した。

第1章と第2章を踏まえ、第3章(研究1)では、日本の中学校と高校に在学する日系ブラジル人生徒を対象に質問紙調査を行った。分析の結果、生徒のエスニックアイデンティティは、《ブラジル人的アイデンティティ》《統合アイデンティティ》《周辺化アイデンティティ》《日本人的アイデンティティ》の4因子構造であることが明らかになった。さらに、《ブラジル人的アイデンティティ》には、家庭生活環境とブラジルへの帰国体験、属性の「来日年齢」が影響しており、《統合アイデンティティ》と《日本人的アイデンティティ》には、家庭生活環境と属性の「滞日年数」が影響を与えていることが示された。

第4章(研究2)では、日本の小・中学校に在学経験のある日系ブラジル人青年を対象に質的調査を行った。分析の結果、エスニックアイデンティティの自己認識に影響を与える体験として、【家庭における体験】【学校における体験】【職場における体験】【帰国体験】の4つの大カテゴリーが抽出された。家庭における体験は、親によって作られた文化的環境の影響を受けていること、学校では周囲から外国人であると認

識される一方で、帰国時のブラジルでは日本人であると認識される体験をしていること、職場では一方的に外国人の出稼ぎ労働者であると認識される体験をしていることなどが示された。各場面での体験をどのように捉えているかが自己認識の形成に影響することが示唆された。

第5章(研究3)では、日系ブラジル人青年が、現在のエスニックアイデンティティの自己認識に至る形成過程を明らかにすることを目的として、事例検討を行った。現在の自己認識は、「ブラジル人的アイデンティティ」「二文化的アイデンティティ」「日本人的アイデンティティ」の3つに分類された。ほとんどの対象者が現在の自己認識に至る過程で葛藤や揺らぎ、エスニシティの意識化などを経験していることが示され、自己認識形成の過程は一人ひとり異なり多様であることがうかがえた。

第6章(研究4)では、研究2の分析結果と研究3の事例から得られた、エスニックアイデンティティの自己認識形成の影響要因として、親子関係、周囲からのエスニシティに関する認識に対する意識、および帰国経験の有無と帰国年齢、帰国に対する自発性について検討した。成長過程で所属する集団や取り巻く環境における、周囲の人々からのエスニシティに関する認識や接する人々との関係性、さらにそれらに対する自身の認識が重要な影響要因となっていることが示唆された。

第7章では、以上の結果から総合的考察を行った。まず、日系ブラジル人青年のエスニックアイデンティティの特徴について述べた。次に、家庭、学校、職場、および帰国時のブラジルにおける周囲からのエスニシティに関する認識による影響について考察した。さらに、日系ブラジル人の子どもが安定したアイデンティティを形成するには、肯定的体験の積み重ねを人的・物理的環境において保障する必要があり、そうしたことにより各場面が彼らの居場所となり、自己肯定感を抱いて主体的に生きる存在になり得ると述べた。当事者の視点から、日系ブラジル人青年の多様かつ流動的なエスニックアイデンティティ形成の様相を示した点は、本研究の意義であるといえる。